

## 第 84 回 防災カフェを開催しました。

### 文化財も防災する

～地域の復興を見据えた文化財防災を考える～

日時：2023年10月27日（金）18時30分～20時

ゲスト：小谷 竜介 さん（独立行政法人国立文化財機構

文化財防災センター 文化財防災総括リーダー）

ファシリテータ：矢田 直樹 さん

（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課 副主幹）



災害時に救援すべき対象として文化財も含まれるようになって久しい。これは文化財が貴重で取り戻せないものであるためである。しかし、それだけであろうか。東日本大震災の被災地における文化財のあり方をみると、貴重性以上に、文化財の日常性ゆえにまもる必要があることが明らかになる。文化財もまもる必要があるのである。



文化財防災センターでは建造物、美術工芸品、民俗文化財等、文化財保護法に記載されている多様な文化財を対象に、関連組織との幅広いネットワークを活かして、文化財防災の体制を構築することを使命としていま

**ゲスト：小谷 竜介さん**

す。そのために、文化財が被災しないための減災の取り組み、災害が発生したときの救援活動の支援、そして被災した文化財の迅速な救援のための体制づくりと技術開発の3つに取り組んでいます。

#### 文化財防災の対象

文化財は国宝や重要文化財のような美しいものだけでもありません。また、仏像であれば国宝や重要文化財ばかりではありません。地域の人たちにとって、お寺の仏像が被災すると、国宝であってもなくても被災したということに変わりはありません。文化財は、国宝・重要文化財のように国民全体の「財」であると同時に、その文化財が所在している地域にとって、地域の歴史・文化を示す証となっています。災害から文化財を守ることは、「財」を守るだけではなく、地域の歴史文化を守ることになります。

#### 現場から

東日本大震災では、宮城県の石巻市文化センターで文化財レスキュー活動に取り組みました。石巻市は人口が11～12万ほどで、宮城県で2番目に大きな都市です。センターは海に近いところに

あったため、1階が津波に襲われ、展示していない資料などを入れておく収蔵庫が浸水しました。どこの博物館でも長く運営していると収蔵庫が足りなくなります。ここも一部の収蔵庫はトラックヤードだったところを改修して増設されていました。壁も津波で抜けてしまい、津波の圧力で資料もうすぐ高く瓦礫みたいになっていたり、あちこちに流されたりしていました。資料を1つずつ廃棄するもの、残すものというように、分けをしながら発掘調査のように作業をしていきました。

石巻文化センターは歴史的な資料だけでなく、現代アートも収集していました。県の美術館の学芸員さんからどういうものがあつたかを聞きました。現代アートの作品ですから、瓦礫のような作品もあり、説明を聞いて作業をしている手がピタッと止まり、全てのものをもう1回チェックしたり、捨てたものを再度調べたりしながら作業を進めていきました。しかし、有名な作家の「つた」という木彫でつくった作品だけ見当たりませんでした。唯一発見できず残念でした。

地域の公文書も洪水や土砂災害で被害を受けやすいものです。茨城県周辺で起こった常総の洪水の際には、役所の文書庫が被災をして、地域の公文書が被害を受けました。何冊かしかない本、1冊しかないものもありますので、救援しないと取り戻すことができなくなります。民俗資料と呼ばれる日常生活用具も被害を受けることはよくあります。

火災防災も最近の一つの取り組みです。香川県の国宝の神谷神社は落雷により火災被害を受けました。文化財の建物の火災で可能性が高いのは放火ですので、外から燃えることを素早く検知をして消火をする体制になっています。落雷のように中から燃えることを想定してないので、手遅れになってしまうこともあります。どういった防災の体制が必要なのかということを考えていく糧にしています。

## 地域の復興と雄勝法印神楽

宮城県の石巻は文化財の宝庫ともいえる場所です。平成の大合併前の旧雄勝町で広く伝承される神楽が重要無形民俗文化財の雄勝法印神楽です。この神楽は、雄勝地区内にある多くの集落の祭礼で奉納されており、旧雄勝町の住民にはなじみ深い存在です。この神楽が被災をしました。神楽師も1名亡くなり、家族を亡くされた神楽師、家を失った方や、道具を収め



ていた神社が流出したり、壊滅的な被害を受けたりして祭礼を行えない神社が続出しました。

震災前は雄勝地区の人口は4,000人ぐらいでしたが、1,000人を切るぐらいになりました。亡くなった方は数百人あまりで、これを機会に町を出て行く方もたくさんいらっしゃいます。仙台と石巻は車で45分から50分ぐらい、仙台と雄勝が1時間10分から15分、そして石巻と雄勝が40分から50分、距離感が合わないと感じられるかもしれませんが、この辺りはリアス式海岸のため、山が迫り湾も入り組んでいますので、道路は海沿いを通るため長い距離になっているからです。

長年、雄勝に住んでいても、車で1時間から1時間半であれば通勤できる距離ですから、仙台や

石巻まで通っておられました。三陸沿岸は山が迫っていて平地が少なく、その平地はほとんど津波で被災しましたので、これまで住んでいた海岸部から離れた内陸部に仮設住宅が造られました。仮設住宅は雄勝から車で 20 分ぐらいですが、仮設住宅から石巻まで 30 分ほどのため、返って通勤が楽になりました。これが人口流出の大きな要因になったと思われます。



この雄勝で行われていたのが雄勝法印神楽です。法印と呼ばれる修験者が行う神楽を法印神楽と呼んでいます。江戸時代の修験者の神楽が元になっていますので、同じ神楽が近在にもあるということになります。明治時代以降になって、修験道が廃止になり、神主になった元修験者の人たちが地域の人に神楽を教えて地域の中で神楽を行うようになっていきました。

神楽を奉納していた浜の多くが壊滅的な被害を受けました。被害の小さな浜でも祭りの中心であるお宮を守っている宮守家が被災して、お祭りができないことになりました。神楽師の多くも家を失ったり、家族も失ったりされました。神社も被災をしたため、神楽の道具もほとんど流されてしまいました。お面のレプリカを作るため業者に貸していたものが唯一被害を受けませんでした。普段使わないお面を入れていたケースとヤマタノオロチの頭（かしら）だけが見つかり、他は装束や楽器の類も含めて全部なくなっていました。

面は神楽では一番大切な道具になります。2011 年の 6 月に雄勝の人たちは仮設住宅や体育館などに避難していた人たちへの慰安講演を行いました。面などは大須浜から借りたということでした。大須は雄勝の中の一つの集落ですが、お面や他の道具の一式を被害と受けたものとは別に持っていました。お面は借り物だから早く返さなきゃいけないと話していました。最初、この言葉の意味が理解できませんでした。用具の再生のお手伝いをするうちに、雄勝の浜ごとに神楽は自分たちのものという意識をもっていることに気が付きました。そしてその象徴が面であることに気がついたのです。

手元には写真しかないので、いろいろな角度から撮影した面の写真を集めて 3 次元のお面をつくるという作業になりました。仏像の修理をされている文化財彫刻の修復工房にお願いしたところ、軽くて柔らかく加工しやすいバルサ材を使って、写真を見ながら仮彫りをつくってくれました。それを神楽師や地域の人に見てもらい、修正して本彫りにしていきました。時間はかかりましたが、神楽で最も重要なお面を全部で 22 面、2 年ほどかけてつくっていきました。

法印神楽は雄勝をはじめ、その近在に多数傳承されています。例えば雄勝の北側、南三陸町の別の場所の神楽が本吉法印神楽です。祭礼の時には、神楽師が集められますが、平日は休みにくいサラリーマンの人もいることもあり、神楽師が揃わなかったりします。そういうときは、他の集落の

神楽師に手伝ってもらうこともあります。この神楽では、神楽師が誰かというのは問われていなくて、どの面をかぶっているのが重要で、この面をかぶって踊ると、本吉法印神楽、雄勝の面をかぶると雄勝法印神楽、大須の面をかぶると大須法印神楽というようになって、誰が舞っているかは問われていません。つまり、雄勝法印神楽の本質は面であることになりしますので、面を取り戻さないと雄勝法印神楽を取り戻したことにはならないことになるのです。

## 神楽は自分たちの浜のもの

雄勝の人々は、神楽は集落ごとに面や装束、舞台を一式用意して、神楽師を招いて行うもの、つまり自分たちの浜のものだと考えています。神楽師にお前下手だから俺に踊らせろと舞台に酔っ払ったおじさんが登ってきたり、神楽師が太鼓を叩いて疲れてくると地元の人を呼び上げて変わってもらったり、女性が上がったり、お客さんと一体となってお客さんを楽しませることが、この神楽の一つの特徴になっています。

震災後、地域社会としての雄勝は非常に不安定な状況になりました。人口は4分の1になり、被害の大きいところはもっと減っていました。この地域はリアス式海岸の特徴で狭い平地と高い山とに囲まれた集落ですので、浜の独立性も高いので、雄勝全体を結びつける存在として神楽は重要な位置を占めています。まさに面を通して、地域の人を結びつけているとも言えます。そして雄勝という地域を繋ぐ一つの大きな存在が神楽師だったわけです。

避難所や仮設住宅では、いくつかの集落の人が集まりますから、他人同士で新しい集落ができていきます。キーワードは旧雄勝町に住んでいたことです。そこで共通言語になるのは神楽です。神楽を復活させるということは、地域の人々の繋がりを導くことになってくるわけです。芸能や文化財を残すことは、単純に文化財として残すだけではなく、地域を復活させる大きな接着剤であり、起爆剤になっているということです。

## 文化財防災を実現するために

文化財防災を実現するために、都道府県などの地域のネットワークと専門家のネットワークを繋いで取り組んでいこうとしています。文化財の防災は必ずしも学芸員や技術者などのプロだけの仕事ではありません。民俗学を学んでいる大学生、地域の主婦の方、東日本大震災後の被災地対応の緊急雇用対策事業で雇われた地元の人などにも被災した資料の処置を担ってもらっていました。文化財の防災を全てプロに頼る必要はないということです。プロしかできないこともありますので、線引きは大切です。文化財は、所有者や行政の方だけでなく、地域の住民、研究者、N P



### 文化財を防災する意義と意味

- 文化財は、単に貴重というだけでは無く、保持し護ることによって、コミュニティにとって災害の前後を繋ぐ架け橋になり得る存在です。
- さらには、平時より護るにより、持続的で豊かな社会を作り上げる一助となります。
- そのためには、過去の災害の経験を活かし、次の災害にむけて、よりよい防災につなげていくことが必要となります。どのような災害がどのような被害をもたらすのか、という情報の共有とその対処法、さらには、ここで紹介してきたようなコミュニティを核とするネットワークを深めていくことで、それが実現できます。そこには...

市民の皆さまの協力が欠かせません。



0の人など、みんなで守っていくことが今後大切になってきます。そのために文化財が自分たちの地域の歴史を示していて、守らなければいけないものなのだとことを知ってもらうことです。そうすれば災害が起こったときに文化財も当然守らなければいけないという機運を高めていけます。なぜなら文化財を守っていくことで地域の復興に資することができるからです。文化財は、単に貴重というだけではなく、コミュニティにとって災害の前後を繋ぐ架け橋になり得る存在です。

さらには、平時から文化財をまもることで、持続的で豊かな社会をつくり上げる一助にもなります。そのためには、過去の災害の経験を活かし、次の災害にむけて、よりよい防災につなげていくことが必要です。そのためには市民の皆様の協力が欠かせません。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：東日本震災が起きて、どれぐらいの時期からお祭りなどが再開され、動き出てきたのでしょうか。

答：お祭りは1年ぐらい経ったら始めまるのかと思っていました。三宅島で全島避難があったときに、3年後に島に戻ってきたら、お祭りができなくなっていたという話が印象に残っていたので、3年もやらずにいるのはだめだと思っていました。道具を取り戻して雄勝法印神楽を再開したのは震災後約2か月経った4月5月の連休中です。その後5月の下旬に地元の商工会が中心となって、再開のための第一歩を踏み出す行事の中でも、神楽が演じられました。

もう一は、お正月の獅子舞です。獅子舞は新年の悪魔祓いの行事ですが、獅子舞には不幸があった人は参加できないと言われていました。この地域では親戚も含めて、喪中ではない人間は1人もいないので、7月にはとてもできないと言われてました。しかし、8月になると20代の若者たちから強く言われて獅子舞をやることを決めたと明るい声で電話がありました。お祭りは、地域を結ぶ力なのだと思います。

問：文化財の事前避難ということも考えられますか。

答：もちろんできる余裕があれば、それをやるに越したことはありませんが、私は東日本大震災の津波を経験していますので、津波から文化財を避難させる訓練をするという相談を受けても、まずは人間が逃げるのが最優先だと思っています。震災の後、ルーブル美術館の人から、何が一番大切かと聞かれたので、学芸員が死なないことと答えました。ものだけが残っても、これが何なのかという情報が失われてしまうと、それは残ったと言えません。知っている人間がいなくなると、結局ものが死ぬのと変わらないという側面もあります。文化財の防災とは言っても、やはりそれ以上に人間の方が大切だと実感して思います。

小谷さん、矢田さん、参加者のみなさん ありがとうございました。



ファシリテータ 矢田 直樹 さん